

## Orlicz 空間の構造と Hardy-Littlewood の最大値関数について

鹿児島大学・教育学部 北 広男 (Hiro-o Kita)  
 Faculty of Education  
 Kagoshima University

### 1. はじめに.

Orlicz 空間の研究は Banach 空間の研究と共に 1931 年に Z. W. Birnbaum and W. Orlicz [BO] によって提唱された. その後 W.Orlicz [Or1], [Or2], [Or3] によって更なる理論が展開された. 日本でも Orlicz 空間に関する研究が活発に行われた. H.Nakano [Na] による modular 空間の研究は Orlicz 空間の一般化とも言えるものである. 又, T. Andô [An1], [An2], [An3] によって N-function の分類や Orlicz 空間の回帰性についての研究がなされた. 近年, Orlicz 空間の重要性が再認識され, 様々な方面で再考察され, 又, 応用もなされている.

Orlicz 空間についての書籍としては M. A. Krasnosel'skii and Ya. B. Rutickii [KR] によるすばらしい本「Convex Functions and Orlicz Spaces」(English translation)がある. 又, M. M. Rao and Z. D. Ren [RR] による「Theory of Orlicz Spaces」の本が 1991 年に出版された. 最近, 同じ著者による「Applications of Orlicz Spaces」[RR2] が出版された. この本では, von Neumann-Jordan 定数や James 定数について Orlicz 空間との関連で記述されている. 岡山県立大学の高橋氏と九州工業大学の加藤氏の結果 [KaT] との関係についても詳しく書かれている.

日本でも近年, Orlicz 空間に詳しい専門家を招聘する機運も高くなっている. 1996 年には Orlicz の弟子の L. Maligranda 教授 (Luleå University) が, 大分大学で開催された実解析学シンポジウムで講演を行った. 2002 年には A. Gogatishvili 教授 (チェコ科学アカデミー) が鹿児島大学で行われた実解析学シンポジウムで講演を行った. その後, 関心を持つ日本の数学者も増え, 今後更なる発展が期待される.

次の section では, Orlicz 空間を定義するのに必要となる Young function と N-function の概念について説明する.

### 2. NOTATIONS AND DEFINITIONS.

我々が扱う関数は  $n$  次元 Euclid 空間  $R^n$  上で定義された実数値可測関数とする.  $R^n$  の部分集合  $E$  の Lebesgue 測度は  $|E|$  で表すものとする. 解析学で重要な役割を果たす  $L^p(R^n)$  空間は  $\int_{R^n} |f(x)|^p dx < \infty$  となる関数  $f$  の集合として定義される.  $\Phi(t) = t^p$  と置くと, すぐ前の積分は  $\int_{R^n} \Phi(|f(x)|) ds < \infty$  となる. この関数の概念を一般化した Young function について説明する.

**Definition 2.1.**  $R^n$  上で定義された measurable function  $w(x)$  が  $R^n$  上の weight function であるとは, 次の性質を持つときとする.

$$(2.1) \quad 0 < w(x) < +\infty \quad \text{for almost everywhere } x \in R^n ;$$

$$(2.2) \quad \int_Q w(x) dx < +\infty \quad \text{for any compact cube } Q \text{ in } R^n .$$

次に, Young function と N-function の概念について説明する.

**Definition 2.2.**  $\Phi : [0, \infty) \rightarrow [0, \infty)$  が次の性質を持つとき, *Young function* と呼ばれる.

$$(2.3) \quad \Phi(t) = \int_0^{|t|} \varphi(s) ds \quad \text{for } t \in R$$

と表すことができる. ここで,  $\varphi(s)$  は  $[0, \infty)$  で定義された non-decreasing right continuous function で,  $\varphi(0) \geq 0$  かつ,  $\varphi(s) > 0$  ( $s > 0$ ) を満たす関数である.

【注意】ここでは, 我々は  $\varphi(s)$  が  $s = 0$  の近傍で恒等的にゼロになる場合や,  $s = +\infty$  の近傍で  $+\infty$  となる場合はさけた.

**Definition 2.3.**  $\Phi(t)$  を Young function とする. この  $\Phi(t)$  が *N-function* であるとは, 次の条件を満たすときとする.

$$(2.4) \quad \lim_{t \rightarrow 0+} \frac{\Phi(t)}{t} = 0 \quad \text{and} \quad \lim_{t \rightarrow \infty} \frac{\Phi(t)}{t} = +\infty.$$

関数  $\varphi(t)$  は (2.3) の中にあらわれる non-decreasing right continuous function とする.  $\varphi(t)$  の *right inverse* は次の式で定義される.

$$(2.5) \quad \varphi^{-1}(s) := \sup\{u : \varphi(u) \leq s\} \quad s \geq 0.$$

関数  $\varphi^{-1}(s)$  を right derivative に持つ N-function, すなわち

$$(2.6) \quad \Psi(t) = \int_0^{|t|} \varphi^{-1}(s) ds \quad t \in R^n$$

は  $\Phi(t)$  の *complementary N-function* と言われる. 次に N-function の例を述べる.

**例 1.**  $\frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$ , ( $1 < p < \infty$ ) とする.

$$\Phi(t) = \int_0^{|t|} s^{p-1} ds = \frac{1}{p} |t|^p, \quad \Psi(t) = \int_0^{|t|} s^{p'-1} ds = \frac{1}{p'} |t|^{p'}.$$

**例 2.**

$$\Phi(t) = \int_0^{|t|} (e^s - 1) ds, \quad \Psi(t) = \int_0^{|t|} \log(s+1) ds.$$

**Definition 2.4.**  $\Phi(t)$  をひとつの N-function とする.  $\alpha > 0$  に対して,

$$(2.7) \quad \Phi(\alpha L) := \left\{ f : \int_{R^n} \Phi(\alpha |f(x)|) dx < +\infty \right\}$$

とおく.

空間  $\Phi(\alpha L)$  は一般に線形空間にならない. 実際,  $R^n = R^1 = (-\infty, \infty)$  で考える. N-function  $\Phi(t)$  として  $\Phi(t) = \int_0^t (e^s - 1) ds = e^t - t - 1$ , ( $t > 0$ ) とする. 関数  $f(x)$  を

$f(x) = (1/2) \log(1/x)$  for  $0 < x \leq 1$ ,  $f(x) = 0$  otherwise とする. このとき

$$\int_{-\infty}^{\infty} \Phi(|f(x)|) dx < +\infty \quad \text{and} \quad \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(2|f(x)|) dx = +\infty .$$

**Definition 2.5.**  $\Phi(t)$  をひとつの Young function とし,  $w(x)$  を  $R^n$  上のひとつの weight とする. 関数空間を次のように定義する.

$$(2.8) \quad \Phi(\alpha L)_w := \left\{ f : \int_{R^n} \Phi(\alpha|f(x)|) w(x) dx < +\infty \right\} \quad \alpha > 0 ,$$

$$(2.9) \quad L_w^\Phi(R^n) := \bigcup_{\varepsilon > 0} \Phi(\varepsilon L)_w ,$$

$$(2.10) \quad M_w^\Phi(R^n) := \bigcap_{\alpha > 0} \Phi(\alpha L)_w .$$

空間  $L_w^\Phi(R^n)$  は Orlicz 空間と呼ばれている. 又,  $M_w^\Phi(R^n)$  は Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  の部分空間であり, Morse-Transue 空間と呼ばれている. 通常の  $L_w^p(R^n)$  空間は  $\Phi(t) = |t|^p$  によって定められる. 又, 例 2 の  $\Psi(t)$  によって定められる Orlicz 空間はよく知られている Zygmund class である. 又,  $1 < p < q < +\infty$  とするとき,  $\Phi(t) \approx \min(|t|^p, |t|^q)$  で定められる Orlicz 空間は  $L_w^p(R^n) + L_w^q(R^n)$  となる. 又,  $\Phi(t) \approx \max(|t|^p, |t|^q)$  で定められる Orlicz 空間は  $L_w^p(R^n) \cap L_w^q(R^n)$  となる.

Definition 2.5 からすぐに次のことがわかる.

$$(2.11) \quad M_w^\Phi(R^n) \subseteq \Phi(L)_w \subseteq L_w^\Phi(R^n) .$$

次に, Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  に Banach 空間の構造をいれる.

**Definition 2.6.**  $\Phi(t)$  を N-function とする.  $f \in L_w^\Phi(R^n)$  に対して,

$$(2.12) \quad \|f\|_{\Phi, w} := \inf \left\{ \lambda > 0 : \int_{R^n} \Phi \left( \frac{1}{\lambda} |f(x)| \right) w(x) dx \leq 1 \right\}$$

と置く.

上の (2.12) で定義される  $\|f\|_{\Phi, w}$  は norm の性質を持ち, Luxemburg-Nakano norm と呼ばれる.

**例 3.**  $1 < p < \infty$ ,  $\Phi(t) = \frac{1}{p}t^p$ ,  $t > 0$  とする. このとき

$$\begin{aligned} \|f\|_{\Phi, w} &= \inf \left\{ \lambda > 0 : \int_{R^n} \frac{1}{p} \left( \frac{1}{\lambda} |f(x)| \right)^p w(x) dx \leq 1 \right\} \\ &= \inf \left\{ \lambda > 0 : \int_{R^n} \frac{1}{p} |f(x)|^p w(x) dx \leq \lambda^p \right\} \\ &= \inf \left\{ \lambda > 0 : \left\{ \int_{R^n} \frac{1}{p} |f(x)|^p w(x) dx \right\}^{1/p} \leq \lambda \right\} \\ &= \left\{ \int_{R^n} \frac{1}{p} |f(x)|^p w(x) dx \right\}^{1/p}. \end{aligned}$$

**例 4.** 簡単な計算により次のことがわかる.  $1 < p < q < +\infty$  とする.  
 $\Phi(t) \approx \min(|t|^p, |t|^q)$ , ならば,

$$L_w^\Phi(R^n) = L_w^p(R^n) + L_w^q(R^n), \quad \|f\|_{\Phi, w} \approx \|f_1\|_{L_w^p} + \|f_2\|_{L_w^q},$$

ここで,  $f_1 = f\chi_{\{|f|>1\}} \in L_w^p(R^n)$ ,  $f_2 = f\chi_{\{|f|\leq 1\}} \in L_w^q(R^n)$  で  $\chi(E)$  は集合  $E$  上の特性関数を表す.

$\Phi(t) \approx \max(|t|^p, |t|^q)$ , ならば,

$$L_w^\Phi(R^n) = L_w^p(R^n) \cap L_w^q(R^n), \quad \|f\|_{\Phi, w} \approx \max\{\|f\|_{L_w^p}, \|f\|_{L_w^q}\}.$$

### 3. ORLICZ 空間の構造と関数列の収束について.

前の section で Orlicz 空間に Luxemburg-Nakano norm を入れることにより, Banach 空間の構造を入れた. 関数列  $\{f_n; n \geq 1\}$  を Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  における関数列とする. この関数列  $\{f_n; n \geq 1\}$  が Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  の関数  $f$  に Luxemburg-Nakano norm の意味で収束するとはどのような事かを考えて見る. はじめに  $\Delta_2$ -条件について述べる.

**Definition 3.1.**  $\Phi(t)$  をひとつの Young function とする.  $\Phi$  が  $[0, \infty)$  で,  $\Delta_2$ -条件を満足するとは, ある正の数  $C > 0$  が存在して

$$(3.1) \quad \Phi(2t) \leq C\Phi(t) \quad \text{for all } 0 \leq t < +\infty$$

が成立することとする.

例として,  $\Phi(t) = |t|^p$ , ( $1 \leq p < +\infty$ ) は  $[0, +\infty)$  で  $\Delta_2$ -条件を満足する.  $\Phi(t) \approx e^t$  は  $t \rightarrow +\infty$  で  $\Delta_2$ -条件を満足しない. 次の結果が知られている.

**Theorem 3.1.**  $M_w^\Phi(R^n) = L_w^\Phi(R^n)$  となるための必要十分条件は,  $\Phi$  が  $\Delta_2$ -条件を満足することである.

Orlicz 空間においては,  $M_w^\Phi(R^n) \subsetneq L_w^\Phi(R^n)$  の場合がたいへん興味深い.

**Definition 3.2.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $\Psi$  を  $\Phi$  の complementary  $N$ -function とする. Orlicz norm  $\|\cdot\|_{L_w^\Phi}$  を次の式で定義する.

(3.2)

$$\|f\|_{L_w^\Phi} := \sup \left\{ \left| \int_{R^n} f(x)g(x)w(x)dx \right| : \int_{R^n} \Psi(|g(x)|)w(x)dx \leq 1 \right\}, f \in L_w^\Phi(R^n).$$

Orlicz norm を計算するには次の Young の不等式が有益である.

**Lemma 3.2.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $\Psi$  を  $\Phi$  の complementary  $N$ -function とする. このとき

$$(3.3) \quad st \leq \Phi(s) + \Psi(t) \quad \text{for all } s, t \geq 0$$

次のことに注意しよう.  $f \in L_w^\Phi(R^n)$  ならば,  $\|f\|_{L_w^\Phi} < +\infty$ . 実際,  $f \in L_w^\Phi(R^n)$  だから, 十分小さな  $\varepsilon_0 > 0$  が存在して,

$$\int_{R^n} \Phi(\varepsilon_0|f(x)|)w(x)dx < +\infty$$

とできる. このとき Young の不等式より,  $\int_{R^n} \Psi(|g(x)|)w(x)dx \leq 1$  なら,

$$\begin{aligned} \left| \int_{R^n} f(x)g(x)w(x)dx \right| &\leq \frac{1}{\varepsilon_0} \int_{R^n} \varepsilon_0|f(x)| \cdot |g(x)|w(x)dx \\ &\leq \frac{1}{\varepsilon_0} \int_{R^n} \{\Phi(\varepsilon_0|f(x)|) + \Psi(|g(x)|)\}w(x)dx \\ &= \frac{1}{\varepsilon_0} \left\{ \int_{R^n} \Phi(\varepsilon_0|f(x)|)w(x)dx + \int_{R^n} \Psi(|g(x)|)w(x)dx \right\} \\ &\leq \frac{1}{\varepsilon_0} \left\{ \int_{R^n} \Phi(\varepsilon_0|f(x)|)w(x)dx + 1 \right\} < +\infty. \end{aligned}$$

ここで,  $g$  について sup をとって  $\|f\|_{L_w^\Phi} < +\infty$  がわかった. □

Orlicz norm  $\|f\|_{L_w^\Phi}$  と Luxemburg-Nakano norm  $\|f\|_{\Phi,w}$  の関係について述べる. はじめにいくつかの Lemma を述べる.

**Lemma 3.3.**  $f \in L_w^\Phi(R^n)$  とする. もし

$$(3.4) \quad \|f\|_{L_w^\Phi} \leq 1 \quad \text{ならば} \quad \int_{R^n} \Phi(|f(x)|)w(x)dx \leq \|f\|_{L_w^\Phi}$$

証明については, [KR], [RR] を参照.

**Lemma 3.4.**  $f \in L_w^\Phi(\mathbb{R}^n)$ ,  $f \neq 0$  とする. このとき

$$(3.5) \quad \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{1}{\|f\|_{L_w^\Phi}} |f(x)| \right) w(x) dx \leq 1$$

が成立する.

**Proof.**  $f_1(x) = f(x)/\|f\|_{L_w^\Phi}$  とおく. このとき  $\|f_1\|_{L_w^\Phi} = 1$  だから, Lemma 3.3 より,

$$\int_{\mathbb{R}^n} \Phi(|f_1(x)|) w(x) dx \leq \|f_1\|_{L_w^\Phi} = 1$$

よって,

$$\int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{|f(x)|}{\|f\|_{L_w^\Phi}} \right) w(x) dx \leq 1$$

となり, (3.5) が示された.  $\square$

**Lemma 3.5.**  $\Phi$  を  $N$ -function とする. このとき次の不等式が成立する.

$$(3.6) \quad \|f\|_{\Phi, w} \leq \|f\|_{L_w^\Phi} \leq 2\|f\|_{\Phi, w} \quad \text{for all } f \in L_w^\Phi.$$

**Proof.** 最初の不等式は, (3.5) と norm  $\|f\|_{\Phi, w}$  の定義から明らかである. 後半の不等式を示す. Young の不等式より,

$$\begin{aligned} \|f\|_{L_w^\Phi} &= \sup \left\{ \left| \int_{\mathbb{R}^n} f(x)g(x)w(x) dx \right| : \int_{\mathbb{R}^n} \Psi(|g(x)|)w(x) dx \leq 1 \right\} \\ &\leq \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(|f(x)|)w(x) dx + 1. \end{aligned}$$

ここで,  $f$  のかわりに  $|f(x)|/\|f\|_{\Phi, w}$  で考えると,

$$\begin{aligned} \left\| \frac{f}{\|f\|_{\Phi, w}} \right\|_{L_w^\Phi} &\leq \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{|f(x)|}{\|f\|_{\Phi, w}} \right) w(x) dx + 1 \\ &\leq 1 + 1 = 2, \end{aligned}$$

ここで,  $\int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{|f(x)|}{\|f\|_{\Phi, w}} \right) w(x) dx \leq 1$  となることは, norm  $\|\cdot\|_{\Phi, w}$  の定義から明らかである. よって,  $\|f\|_{L_w^\Phi} \leq 2\|f\|_{\Phi, w}$  が示された.  $\square$

さて, 関数列の収束について次の性質が成り立つ.

**Theorem 3.6.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とする. 関数列  $\{f_j : j \geq 1\}$  は  $f_j \in M_w^\Phi$  ( $j \geq 1$ ),  $f \in M_w^\Phi$  とする. このとき

$$(3.7) \quad \|f_j - f\|_{\Phi, w} \rightarrow 0 \quad \text{as } j \rightarrow +\infty$$

となるための必要十分条件は,

$$(3.8) \quad \lim_{j \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x) dx = 0 \quad \text{for every } \alpha > 0.$$

**Proof.** はじめに (3.8) を仮定して (3.7) を示す. ここで,  $g(x)$  を  $\int_{R^n} \Psi(|g(x)|)w(x)dx \leq 1$  となる任意の関数とする. ここで,  $\Psi$  は  $\Phi$  の complementary Young function. このとき  $\alpha > 1$  とすると, Young の不等式より

$$\begin{aligned} I_j &:= \left| \int_{R^n} (f_j(x) - f(x))g(x)w(x)dx \right| \leq \int_{R^n} |f_j(x) - f(x)||g(x)|w(x)dx \\ &= \int_{R^n} (\alpha|f_j(x) - f(x)|) \left( \frac{1}{\alpha}|g(x)| \right) w(x)dx \\ &\leq \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx + \int_{R^n} \Psi\left(\frac{1}{\alpha}|g(x)|\right)w(x)dx \\ &\leq \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx + \frac{1}{\alpha} \int_{R^n} \Psi(|g(x)|)w(x)dx \\ &\leq \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx + \frac{1}{\alpha} \cdot 1. \end{aligned}$$

$g$  について sup をとると,

$$\|f_j - f\|_{L_w^\Phi} \leq \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx + \frac{1}{\alpha} \cdot 1.$$

Lemma 3.5 の不等式 (3.6) より,

$$\|f_j - f\|_{\Phi, w} \leq \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx + \frac{1}{\alpha} \cdot 1.$$

よって,  $\overline{\lim}_{j \rightarrow \infty} \|f_j - f\|_{\Phi, w} \leq 1/\alpha$ .  $\alpha > 1$  は任意だから,  $\lim_{j \rightarrow \infty} \|f_j - f\|_{\Phi, w} = 0$ .

逆を示す.  $\lim_{j \rightarrow \infty} \|f_j - f\|_{\Phi, w} = 0$  を仮定する.  $\alpha > 0$  を任意に固定する. 仮定より, ある十分大きな自然数  $j_0 \in N$  が存在して,

$$(3.9) \quad \alpha \|f_j - f\|_{\Phi, w} \leq \frac{1}{2} \quad \text{for } j \geq j_0.$$

このとき, Lemma 3.5 より,  $j \geq j_0$  のとき

$$\|\alpha(f_j - f)\|_{L_w^\Phi} \leq 2\|\alpha(f_j - f)\|_{\Phi, w} = 2\alpha\|f_j - f\|_{\Phi, w} \leq 1.$$

よって

$$\|\alpha(f_j - f)\|_{L_w^\Phi} \leq 1 \quad \text{for } j \geq j_0.$$

よって, Lemma 3.3 と Lemma 3.5 より,  $j \geq j_0$  のとき

$$\begin{aligned} \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx &\leq \|\alpha(f_j - f)\|_{L_w^\Phi} \\ &\leq 2\|\alpha(f_j - f)\|_{\Phi, w} \\ &= 2\alpha\|(f_j - f)\|_{\Phi, w} \rightarrow 0 \quad \text{as } j \rightarrow \infty. \end{aligned}$$

よって,

$$\lim_{j \rightarrow +\infty} \int_{R^n} \Phi(\alpha|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx = 0$$

が示された. □

さて、空間  $\Phi(L)$  は一般に線形空間にならないが、次のような平均収束が考えられている。

$$\int_{R^n} \Phi(|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx \rightarrow 0 \quad \text{as } j \rightarrow \infty.$$

よって、 $\Phi(L)$  より広い Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  では次のような収束を考えるのは自然であるように思われる。ある十分小さな正の数  $\varepsilon_0$  が存在して

$$(3.10) \quad \int_{R^n} \Phi(\varepsilon_0|f_j(x) - f(x)|)w(x)dx \rightarrow 0 \quad \text{as } j \rightarrow \infty.$$

Orlicz 空間  $L_w^\Phi$  に ranked space (階位空間) の構造をいれて、(3.10) の収束と同値にできることが知られている [KY3].

Orlicz space は Banach space となるのでたいへん魅力的であり、種々の norm 不等式を導くことができる。Young function が  $\Delta_2$ -条件を満足しない場合には Orlicz space の構造としては ranked space としての構造を入れて考察するほうが自然であるように思われる。ただし、ranked space としての取り扱いは単純ではないので、今後の研究が更に必要となる。

#### 4. 一般化された ORLICZ SPACE 及び、MODULAR FUNCTION SPACE について.

Orlicz 空間  $L_w^\Phi(R^n)$  を定義するための N-function は convex function であった。convex 性は、三角不等式

$$\|f + g\|_{\Phi, w} \leq \|f\|_{\Phi, w} + \|g\|_{\Phi, w}$$

と密接に関係している。しかし、実際の応用の場合には convex でない  $\Phi$  を扱う必要が生じてくる。次のような不等式の例がある。

$$\begin{aligned} & \int_{Mf \leq 1} \frac{Mf(x)w(x)dx}{(1 - \log Mf(x))(1 + \log(1 - \log Mf(x)))^{1+\varepsilon}} + \int_{Mf > 1} \frac{Mf(x)w(x)dx}{(1 + \log Mf(x))^{1-\varepsilon}} \\ & \leq \frac{C}{\varepsilon} \left\{ \int_{|f| \leq 1} \frac{|f(x)|w(x)dx}{(1 + \log(1 - \log |f(x)|))^\varepsilon} + \int_{|f| > 1} |f(x)|(1 + \log |f(x)|)^\varepsilon w(x)dx \right\}. \end{aligned}$$

ここで、 $0 < \varepsilon < 1$ ,  $M$  は Hardy-Littlewood の最大値関数、

$$Mf(x) := \sup_{x \in Q} \frac{1}{|Q|} \int_Q |f(y)|dy,$$

sup は軸に平行なすべての cubes  $Q \subseteq R^n$  についてとられるものとする。上の不等式に対応する関数  $\Phi(t)$ ,  $\Psi(t)$  は

$$\Phi(t) = \begin{cases} \frac{t}{(1 - \log t)(1 + \log(1 - \log t))^{1+\varepsilon}}, & 0 < t \leq 1; \\ \frac{t}{(1 + \log t)^{1-\varepsilon}}, & t > 1 \end{cases}$$

$$\Psi(t) = \begin{cases} \frac{t}{\varepsilon(1 + \log(1 - \log t))^\varepsilon}, & 0 < t \leq 1; \\ \frac{1}{\varepsilon} t(1 + \log t)^\varepsilon, & t > 1. \end{cases}$$

このとき、すぐ前でのべた不等式は、

$$\int_{R^n} \Phi(Mf(x))w(x)dx \leq C \int_{R^n} \Psi(|f(x)|)w(x)dx$$

となる. 関数  $\Phi(t)$  は convex ではない. convex でない関数  $\Phi(t)$  に対応する関数空間を考える.

**Definition 4.1.**  $\Phi : [0, \infty) \rightarrow [0, \infty)$  が  $\varphi$ -function であるとは, 次の性質を満足するときとする.

- (1)  $\Phi(0) = 0$  ;
- (2)  $\lim_{t \rightarrow \infty} \Phi(t) = +\infty$  ;
- (3)  $\Phi$  は strictly increasing
- (4)  $\Phi$  は continuous ;

**Definition 4.2.**  $\Phi$  をひとつの  $\varphi$ -function とする. このとき

$$\rho_{\Phi}(f) := \int_{R^n} \Phi(|f(x)|)w(x)dx$$

によって functional  $\rho_{\Phi}$  を定める.

$\rho_{\Phi}$  は次に述べる modular functional の重要な例である.  $\mathcal{M}$  を  $R^n$  上で定義された extended real valued measurable functions の全体とする.

**Definition 4.3.** functional  $\rho : \mathcal{M} \rightarrow [0, \infty]$  が modular functional on  $\mathcal{M}$  であるとは次の性質を持つときとする.

- (MF-1) :  $\rho(f) = 0$  if and only if  $f = 0$  ;
- (MF-2) :  $\rho(f) = \rho(|f|)$  for all  $f \in \mathcal{M}$  ;
- (MF-3) :  $\rho(\alpha f + \beta g) \leq \rho(f) + \rho(g)$  for all  $f, g \in \mathcal{M}$ , ここで  $\alpha, \beta \geq 0, \alpha + \beta = 1$  ;
- (MF-4) :  $0 \leq g \leq f$  a.e.  $\implies \rho(g) \leq \rho(f)$  ;
- (MF-5) :  $0 \leq f_j \uparrow f$  as  $j \rightarrow \infty$  a.e.  $\implies \rho(f_j) \uparrow \rho(f)$  as  $j \rightarrow \infty$  ;
- (MF-6) :  $|E| < \infty$ ,  $\implies \rho(\frac{1}{\lambda}\chi_E) < \infty$  for some  $\lambda > 0$  ;
- (MF-7) :  $\rho(f) < \infty, f \in \mathcal{M} \implies f(x)$  is finite a.e.  $x \in R^n$  .

modular functional  $\rho$  を用いて関数空間  $X_{\rho}^*, X_{\rho}$  を次のように定義する.

$$X_{\rho}^* := \{f \in \mathcal{M} : \rho(\lambda f) < \infty \text{ for some } \lambda > 0\},$$

$$X_{\rho} := \{f \in \mathcal{M} : \lim_{\lambda \rightarrow 0+} \rho(\lambda f) = 0\}.$$

(明らかに  $X_{\rho} \subseteq X_{\rho}^*$ )

又,  $f \in X_{\rho}^*$  の F-norm  $|f|_{\rho}$  を次のように定義する.

$$|f|_{\rho} := \inf\{u > 0 : \rho(f/u) \leq u\}$$

このとき,  $|f|_\rho < +\infty$  となるための必要十分条件は  $f \in X_\rho^*$  であることが知られている.

**Theorem 4.1.**  $|f|_\rho$  について次の性質が成り立つ.

- (1):  $|f|_\rho = 0 \iff f \in X_\rho^* \iff f = 0$  ;  
 (2):  $|-f|_\rho = |f|_\rho$  for all  $f \in X_\rho^*$  ;  
 (3):  $|f+g|_\rho \leq |f|_\rho + |g|_\rho$  all  $f, g \in X_\rho^*$  ;  
 (4):  $f_k \in X_\rho^*, f \in X_\rho$  とする  
 $\alpha_k \rightarrow \alpha, |f_k - f|_\rho \rightarrow 0 \Rightarrow |\alpha_k f_k - \alpha f|_\rho \rightarrow 0 \ (k \rightarrow \infty)$

modular function space についての詳細については, H. Kita, T. Miyamoto and K. Yoneda, *Modular function spaces and control functions of almost everywhere convergence*, Commentationes Mathematicae (Poznan). **41** (2001) 99–133. を参照してほしい.

## 5. HARDY LITTLEWOOD の最大値関数について.

はじめに, いくつかの notations と definitions を与えることから始めよう.  $R^n$  によって,  $n$  次元 Euclidean 空間を表す. 我々は  $R^n$  上で定義された real valued measurable functions  $f$  を考える. ここでは  $|E|$  は  $R^n$  の measurable subset  $E$  の the Lebesgue measure を意味する.

**Definition 5.1.** 古典的な Hardy-Littlewood の最大値関数は次の式で定義される.

$$Mf(x) := \sup_{x \in Q} \frac{1}{|Q|} \int_Q |f(y)| dy,$$

ここで, supremum は  $x \in Q$  となるすべての cubes  $Q$  (cube はいつでも軸に平行な辺を持つ cube を意味する) にわたって取られる.

**Definition 5.2.** A locally integrable almost everywhere positive function  $w : R^n \rightarrow [0, \infty)$  は weight function と言われる.

Muckenhoupt は [Muc] の中で, Hardy-Littlewood の最大値関数が  $L^p(\mathbb{R}^n, w(x)dx)$  で bounded となるための  $w$  のすばらしい特徴付けを与えた. 即ち次の結果をあたえた.

**Theorem 5.1.** (Muckenhoupt)  $1 < p < \infty$  とする. Hardy-Littlewood の最大値関数  $M$  が  $L^p(\mathbb{R}^n, w(x)dx)$  上で bounded となるための必要十分条件は, weight  $w$  が次の性質を持つことである. ある正数  $C > 0$  が存在して,

$$(5.1) \quad \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q w(x) dx \right) \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q w(x)^{\frac{-1}{p-1}} dx \right)^{p-1} \leq C \text{ for all cubes } Q \text{ in } \mathbb{R}^n.$$

A weight function  $w$  が (5.1) を満足するとき,  $w$  は  $A_p$  condition を満足するという.  $w \in A_p$  と表す.

Kerman and Torchinsky [KT] は weighted Orlicz spaces の場合に Muckenhoupt の結果を拡張した. 彼らは weight function の class として  $A_\Phi$  を定義した (see Definition 5.4). Bagby [Ba] は Hardy-Littlewood の 最大値関数が weak type の不等式

$$\int_{\{x: Mf(x) > \lambda\}} w(x) dx \leq \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(C|f(x)|/\lambda) w(x) dx \quad \text{for all } \lambda > 0 \quad \text{and all } f$$

を満足するような weight の class  $B_\Phi$  を導入した. (see Definition 5.6).

この節では, 我々はふたつの weight class  $A_\Phi$  と  $B_\Phi$  の関係を論議し, いくつかの新しい結果を与える.

Kerman and Torchinsky [KT] は  $\Phi$  と  $\tilde{\Phi}$  がともに  $\Delta_2$  に属するとき  $A_p$  weight の概念を拡張して次の  $A_\Phi$  weight の概念を与えた.

**Definition 5.3.**  $\Phi$  をひとつの Young function とし,  $\tilde{\Phi}$  をその complementary Young function とする.  $\Phi, \tilde{\Phi}$  がともに  $\Delta_2$  条件を満足するとする. このとき, weight  $w$  が  $A_\Phi$  weight ( $A_\Phi$  条件を満たす) とは, ( $w \in A_\Phi$  とあらわす), ある正の定数  $C > 0$  が存在して,

$$(5.2) \quad \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq C$$

がすべての cube  $Q$  とすべての  $\varepsilon > 0$  にたいして成立する. ここで,  $\varphi$  は  $\Phi$  の right derivative で  $\varphi^{-1}$  は  $\varphi$  の right inverse である.

Kerman and Torchinsky [KT] の中で次の結果が与えられている.

**Theorem 5.2.** (Kerman and Torchinsky)  $\Phi$  を Young function とする.  $\Phi, \tilde{\Phi}$  がともに  $\Delta_2$  条件を満足するとする.  $w$  をひとつの weight function とする. このとき Hardy-Littlewood の maximal function  $M$  について次の不等式

$$(5.3) \quad \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(Mf(x)) w(x) dx \leq C \int_{\mathbb{R}^n} \Phi(|f(x)|) w(x) dx \quad \text{for all } f$$

が成立するための必要十分条件は  $w \in A_\Phi$  となることである.

この論文では,  $\Phi$  が必ずしも  $\Delta_2$  条件を満足しない場合にも適用したいので,  $A_\Phi$  weight の定義を少し拡張しておく.

**Definition 5.4.**  $\Phi$  をひとつの N-function とし,  $\tilde{\Phi}$  をその complementary N-function とする.  $\Phi, \tilde{\Phi}$  の right derivative をそれぞれ  $\varphi, \varphi^{-1}$  とする. このとき, weight  $w$  が  $A_\Phi^e$  weight ( $A_\Phi^e$  条件を満たす) とは, ( $w \in A_\Phi^e$  とあらわす), ある正の定数  $C_1 > 0$  (十分小) と  $C_2 > 0$  (十分大) が存在して,

$$(5.4) \quad \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq C_2$$

がすべての cube  $Q$  とすべての  $\varepsilon > 0$  にたいして成立することとする.

上で与えられた定義は, Kokilashvili and Krbeč ([KK] p. 43) の中で与えられている定義と同値である. 即ち, 次の Lemma が成立する.

**Lemma 5.3.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $\tilde{\Phi}$  をその complementary  $N$ -function とする. 更に,  $R_\Phi(t) = \Phi(t)/t$ ,  $S_\Phi(t) = \tilde{\Phi}(t)/t$  とおく. このとき, weight  $w$  が  $A_\Phi^e$  weight となるための必要十分条件は, ある正の定数  $C_1 > 0$  (十分小) と  $C_2 > 0$  (十分大) が存在して,

$$(5.5) \quad \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) R_\Phi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq C_2$$

がすべての cube  $Q$  とすべての  $\varepsilon > 0$  にたいして成立することである.

**Proof.** はじめに  $w \in A_\Phi^e$  であると仮定する. このとき, ある正の定数  $C_1, C_2 > 0$  が存在して, (5.4) の不等式が成立する. 即ち,

$$\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq C_2$$

がすべての cubes  $Q$  とすべての  $\varepsilon > 0$  に対して成立する. 又,  $R_\Phi(t), S_\Phi(t)$  の定義より

$$\begin{aligned} R_\Phi(t) &= \frac{\Phi(t)}{t} = \frac{\int_0^t \varphi(s) ds}{t} \leq \frac{t\varphi(t)}{t} = \varphi(t), \\ S_\Phi(t) &= \frac{\tilde{\Phi}(t)}{t} = \frac{\int_0^t \varphi^{-1}(s) ds}{t} \leq \frac{t\varphi^{-1}(t)}{t} = \varphi^{-1}(t). \end{aligned}$$

よって (5.4) より,

$$\begin{aligned} &\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) R_\Phi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \\ &\leq \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq C_2 \end{aligned}$$

となり (5.5) がすべての cube  $Q$  と  $\varepsilon > 0$  に対して成立することがわかった.

次に, 逆を示す. 即ち, ある正の定数  $C_1$  と  $C_2$  が存在して, (5.5) が成立したとする. 又,  $R_\Phi$  及び  $S_\Phi$  の定義より

$$\begin{aligned} 2R_\Phi(2t) &= \frac{2\Phi(t)}{2t} = \frac{\int_0^{2t} \varphi(s) ds}{t} \geq \frac{\int_t^{2t} \varphi(s) ds}{t} \geq \frac{t\varphi(t)}{t} = \varphi(t), \\ 2S_\Phi(2t) &= \frac{2\tilde{\Phi}(t)}{2t} = \frac{\int_0^{2t} \varphi^{-1}(s) ds}{t} \geq \frac{\int_t^{2t} \varphi^{-1}(s) ds}{t} \geq \frac{t\varphi^{-1}(t)}{t} = \varphi^{-1}(t). \end{aligned}$$

このとき,

$$\begin{aligned}
 & \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q (2\varepsilon)w(x)dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{4|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{(2\varepsilon)w(x)} \right) dx \right) \\
 & \leq \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q (2\varepsilon)w(x)dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{4|Q|} \int_Q 2S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \\
 & = 2 \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x)dx \right) \varphi \left( \frac{C_1}{2|Q|} \int_Q S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \\
 & \leq 2 \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x)dx \right) 2R_\Phi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \\
 & = 4 \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x)dx \right) R_\Phi \left( \frac{C_1}{|Q|} \int_Q S_\Phi \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq 4C_2.
 \end{aligned}$$

よって,  $2\varepsilon = \varepsilon'$ ,  $(1/4)C_1 = C_1'$ ,  $4C_2 = C_2'$  とおくととき, 次の不等式が成立することがわかった.

$$\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon' w(x)dx \right) \varphi \left( \frac{C_1'}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon' w(x)} \right) dx \right) \leq C_2',$$

ここで,  $Q, \varepsilon' > 0$  は任意であった. よって  $w \in A_\Phi^*$  がわかった.  $\square$

また, Bagby [Ba] は Hardy-Littlewood の maximal operator  $M$  の weak type の不等式に関して weight class  $B_\Phi$  を導入した.

**Definition 5.5.** ひとつの weight  $w$  が doubling measure であるとは, ある正の定数  $C > 0$  が存在して,

$$(5.6) \quad w(2Q) \leq Cw(Q) \quad \text{for all cubes } Q,$$

ここで,  $2Q$  は中心が  $Q$  と同じで, 1辺の長さが  $Q$  の2倍の cube である.

次に, weight class  $B_\Phi$  を定義する.

**Definition 5.6.**  $w$  をひとつの nontrivial weight とし,  $\Phi$  をひとつの N-function とする.  $w$  が  $B_\Phi$  条件を満足するとは,  $(w \in B_\Phi)$ , ある正の定数  $C > 0$  が存在して

$$(5.7) \quad w\{x \in \mathbb{R}^n : Mf(x) > \lambda\} \leq \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{C|f(x)|}{\lambda} \right) w(x)dx$$

がすべての  $\lambda > 0$  とすべての  $f \in L^\Phi(\mathbb{R}^n, w(x)dx)$  に対して成立するときとする.

**Definition 5.7.**  $\Phi$  をひとつの N-function とし,  $w$  をひとつの weight function とする. 任意の cube  $Q \subseteq \mathbb{R}^n$  をひとつ固定する. このとき,

$$(5.8) \quad \|f\|_{\Phi, w, Q} := \inf \left\{ \lambda > 0 : \int_Q \Phi \left( \frac{|f(x)|}{\lambda} \right) w(x)dx \leq w(Q) \right\}$$

と置く.  $\|f\|_{\Phi, w, Q} < +\infty$  となる  $f$  の全体を  $L^\Phi(Q, \frac{w(x)}{w(Q)}dx)$  で表す.

この概念を利用して, Bagby [Ba] は次の重要な結果を示した.

**Theorem 5.4** (Bagby).  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $w$  をひとつの *nontrivial weight* とする. このとき,  $w \in B_\Phi$  となるための必要十分条件は  $w$  がひとつの *doubling measure* であってかつ, ある正の定数  $C > 0$  が存在して

$$(5.9) \quad \frac{w(Q)}{|Q|} \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \leq C \quad \text{for all cubes } Q$$

となることである.

不等式 (5.9) は次の不等式の statement と同値であることは, Definition 5.7 からすぐわかる. 即ち, 十分小さな正の定数  $\varepsilon_0 > 0$  が存在して,

$$(5.10) \quad \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{\varepsilon_0 w(Q)}{|Q|} \cdot \frac{1}{w(x)} \right) w(x) dx \leq w(Q) \quad \text{for all cubes } Q \subseteq \mathbb{R}^n.$$

次に, weight class  $A_\Phi^*$  と  $B_\Phi$  との関係について論議する. 前に述べた Kerman and Torchinsky の結果より. 次のことがすぐに分かる.

**Theorem 5.5.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とする. もし,  $\Phi, \tilde{\Phi} \in \Delta_2$  ならば,  $A_\Phi^* \subseteq B_\Phi$  が成立する.

**Proof.**  $\Phi$  をひとつの Young function とし,  $\Phi$  の right derivative を  $\varphi$  とする.  $\Phi \in \Delta_2$  のとき  $\varphi$  もまた  $\varphi \in \Delta_2$  であることに注意しておく. 実際,  $\Phi \in \Delta_2$  だから

$$\Phi(4t) = \Phi(2 \cdot 2t) \leq C\Phi(2t) \leq C^2\Phi(t) \quad \text{for } t \geq 0,$$

ここで, 定数  $C > 0$  は Definition 2.4 中の定数である. よって  $t \geq 0$  のとき,

$$\begin{aligned} (2t)\varphi(2t) &\leq \int_{2t}^{4t} \varphi(s) ds \leq \int_0^{4t} \varphi(s) ds = \Phi(4t) \\ &\leq C^2\Phi(t) = C^2 \int_0^t \varphi(s) ds \leq C^2 t \varphi(t). \end{aligned}$$

よって  $t > 0$  のとき両辺を  $2t > 0$  で割ると,

$$\varphi(2t) \leq \frac{C^2}{2} \varphi(t)$$

となる.  $t = 0$  のときには  $\varphi$  の右連続性により, もし  $\varphi(0) = 0$  なら上の式は両辺ともゼロで成立する. もし  $a = \varphi(0+) > 0$  なら,  $C > 0$  をあらためて  $C^2/2 \geq 1$  と取りなおせば上の式は  $t = 0$  でも成立する. よって  $\varphi \in \Delta_2$  が成立する.

さて,  $w \in A_\Phi^*$  を任意の weight とする.  $\varphi \in \Delta_2$  であつたから weight の定義より  $w \in A_\Phi$  となる. また, この定理の仮定より  $\Phi, \tilde{\Phi} \in \Delta_2$  だから, Kerman Torchinsky の定理 Theorem 5.2 より strong type の不等式 (5.3) が成立する. 不等式 (5.3) で  $f$  の代わりに  $f/\lambda$  で置き換える. ここで  $\lambda > 0$  は任意. このとき

$$(5.11) \quad \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{1}{\lambda} Mf(x) \right) w(x) dx \leq C \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{1}{\lambda} |f(x)| \right) w(x) dx \quad \text{for all } f$$

次に, 集合  $E(\lambda)$  を  $E(\lambda) := \{x \in \mathbb{R}^n : Mf(x) > \lambda\}$  と置く. このとき, (5.11) より

$$\Phi(1) \int_{E(\lambda)} w(x) dx \leq C \int_{\mathbb{R}^n} \Phi \left( \frac{1}{\lambda} |f(x)| \right) w(x) dx \quad \text{for all } f.$$

$\Phi \in \Delta_2$  だから  $\Phi(t) > 0$  がすべての  $t > 0$  が成立するから,  $\Phi(1) > 0$  となる. よって必要ならば  $C > 0$  を十分大きく取り直して  $C/\Phi(1) > 1$  としておく. このとき  $C_1 = C/\Phi(1) > 1$  とおいたとき,  $\Phi$  の凸性により次の不等式が得られる.

$$\begin{aligned} w(E(\lambda)) &\leq C_1 \int_{\mathbb{R}^n} \Phi\left(\frac{1}{\lambda}|f(x)|\right) w(x) dx \\ &\leq \int_{\mathbb{R}^n} \Phi\left(\frac{C_1}{\lambda}|f(x)|\right) w(x) dx. \end{aligned}$$

よって, Definition 5.6 の不等式 (5.7) が成立することがわかった. よって  $w \in B_\Phi$  が示された.  $\square$

Theorem 5.5 においては,  $\Phi$  と  $\tilde{\Phi}$  の両方が  $\Delta_2$ -条件を満足することが仮定されている.  $\Phi$  の  $\Delta_2$ -条件を仮定しない場合については, Kokilashvili and Krbeč [KK] p. 43 の中で次の結果が与えられている.

**Theorem 5.6.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  とする.  $w$  を *weight function* on  $\mathbb{R}^1$  (一次元) で, もし  $w \in A_\Phi^*$  ならば, ある正の数  $C > 0$  が存在して,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \Phi(Mf(x))w(x)dx \leq C \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(|f(x)|)w(x)dx \quad \text{for all } f$$

上の結果は一次元の場合であることに注意してほしい. この結果からすぐに次の結果が得られる.

**Theorem 5.7.**  $\Phi$  をひとつの  $N$ -function とし,  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  とする. もし  $w$  が  $\mathbb{R}^1$  (一次元) 上の *weight function* で,  $w \in A_\Phi^*$  ならば,  $w \in B_\Phi$  となる. すなわち,  $A_\Phi^* \subseteq B_\Phi$  となる.

**Proof.**  $\Phi$  をひとつの Young function とし,  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  とする.  $w \in A_\Phi^*$  ならば, Theorem 5.6 より,

$$(5.12) \quad \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(Mf(x))w(x)dx \leq C \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(|f(x)|)w(x)dx \quad \text{for all } f$$

が成り立つ. 今,  $\Phi$  は  $\lim_{t \rightarrow \infty} \Phi(t) = +\infty$  だから, 十分大きな定数  $C_1 > 0$  が存在して,  $\Phi(C_1) > 0$  とできる. 必要ならば, (5.12) の定数  $C > 0$  を大きくとりなおして  $C/\Phi(C_1) > 1$  としておく.  $\lambda > 0$  を任意の正数として,  $f$  の代わりに  $C_1 f/\lambda$  で置き換える. このとき,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \Phi\left(\frac{C_1 Mf(x)}{\lambda}\right) w(x)dx \leq C \int_{-\infty}^{\infty} \Phi\left(\frac{C_1 |f(x)|}{\lambda}\right) w(x)dx \quad \text{for all } f$$

次に,  $E(\lambda) := \{x \in \mathbb{R}^1 : Mf(x) > \lambda\}$  と置く. 上の不等式より,

$$\Phi(C_1) \int_{E(\lambda)} w(x)dx \leq C \int_{-\infty}^{\infty} \Phi\left(\frac{C_1 |f(x)|}{\lambda}\right) w(x)dx.$$

$\Phi(C_1) > 0$  だから

$$w(E(\lambda)) \leq \frac{C}{\Phi(C_1)} \int_{-\infty}^{\infty} \Phi\left(\frac{C_1|f(x)|}{\lambda}\right) w(x) dx.$$

となる. また,  $C/\Phi(C_1) > 1$  であり,  $\Phi$  は convex だから,

$$w(E(\lambda)) \leq \int_{-\infty}^{\infty} \Phi\left(\frac{C_2|f(x)|}{\lambda}\right) w(x) dx \quad \text{for all } \lambda > 0,$$

ここで,  $C_2 = CC_1/\Phi(C_1)$  である. よって  $w \in B_{\Phi}$  が示された.  $\square$

我々の目的は,  $A_{\Phi}^e \subseteq B_{\Phi}$  となることを, より一般的に直接, Hardy-Littlewood の maximal function を使うことなしに証明することである. Fiorenza [Fi] は, N-function  $\Phi$  に条件をつけることにより次の結果を証明した.

**Theorem 5.8** (Fiorenza). N-function  $\Phi$  は次の性質を持つものとする.  $\Phi$  の right derivative  $\varphi(s)$  は continuous, nondecreasing で次の性質を持つものとする.

$$(5.13) \quad \varphi(s) > 0 \quad \text{if } s > 0, \quad \varphi(0) = 0, \quad \lim_{s \rightarrow \infty} \varphi(s) = +\infty.$$

更に,  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  と仮定する. このとき,  $A_{\tilde{\Phi}} \subseteq B_{\tilde{\Phi}}$  が成立する.

Fiorenza の論文の中では,  $\Phi$  の  $\Delta_2$  条件を仮定することなしに, 又 Hardy-Littlewood の maximal function を使うことなく証明が与えられている. 我々は上の Theorem 5.8 をより一般的な条件のもと ( $\Phi$  の  $\Delta_2$  条件を仮定せず,  $\tilde{\Phi}$  の  $\Delta_2$  条件も仮定せず, 又 Hardy-Littlewood の maximal function も使用しない) で次の結果を得ることができた.

**Theorem 5.9.**  $\Phi$  をひとつの N-function とする. このとき, 次の包含関係が成立する.

$$(5.14) \quad A_{\Phi}^e \subseteq B_{\Phi}$$

**Proof.**  $w \in A_{\Phi}^e$  を任意に取り出す. このとき,  $A_{\Phi}^e$  weight の定義の Definition 5.4 よりある正の定数  $C_1, C_2$  が存在して,

$$\left(\frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx\right) \varphi\left(\frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{\varepsilon w(x)}\right) dx\right) \leq C_2$$

具体的な  $\varepsilon > 0$  は後ほど与える. このとき

$$\varphi\left(\frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{\varepsilon w(x)}\right) dx\right) \leq \frac{C_2|Q|}{\varepsilon \cdot w(Q)}$$

が成立する. 又, 関数  $\varphi^{-1}$  は nondecreasing だから

$$(5.15) \quad \varphi^{-1}\left(\varphi\left(\frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{\varepsilon w(x)}\right) dx\right)\right) \leq \varphi^{-1}\left(\frac{C_2|Q|}{\varepsilon \cdot w(Q)}\right).$$

さて,  $\varphi$  は  $\Phi$  の right derivative で  $\varphi^{-1}$  は  $\tilde{\Phi}$  の right derivative だから,  $\varphi, \varphi^{-1}$  は共に right continuous である. よって,

$$\varphi^{-1}(\varphi(a)) \geq a \quad \text{for all } a \geq 0.$$

が成立する. よって, (5.15) より次の不等式が成立する.

$$\frac{C_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \leq \varphi^{-1} \left( \frac{C_2 |Q|}{\varepsilon \cdot w(Q)} \right) \quad \text{for every cube } Q \text{ and } \varepsilon > 0.$$

よって次の結果が得られた.

$$(5.16) \quad \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \leq \frac{|Q|}{C_1} \varphi^{-1} \left( \frac{C_2 |Q|}{\varepsilon \cdot w(Q)} \right) \quad \text{for every cube } Q \text{ and } \varepsilon > 0.$$

次に, 正の定数  $C_0$  を十分大きくとって

$$(5.17) \quad C_0 > \max \left( C_2, \frac{\varphi^{-1}(1)}{C_1} \right)$$

となるようにしておく,  $C_0$  は cube  $Q$  や  $\varepsilon > 0$  に無関係な定数. 又,  $\tilde{\Phi}(t) = \int_0^t \varphi^{-1}(s) ds \leq t\varphi^{-1}(t)$  だから,

$$\begin{aligned} & \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) w(x) dx \\ & \leq \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) \cdot \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \cdot w(x) dx \\ & = \frac{w(Q)}{C_0 |Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) dx. \end{aligned}$$

よって, 次の不等式が得られる.

$$\int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) w(x) dx \leq \frac{w(Q)}{C_0 |Q|} \cdot \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\frac{w(Q)}{C_0 |Q|} \cdot w(x)} \right) dx.$$

ここで, (5.16) の不等式で,  $\varepsilon = \frac{C_0 |Q|}{w(Q)}$  と置く, このとき

$$\begin{aligned} & \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) w(x) dx \\ & \leq \frac{w(Q)}{C_0 |Q|} \cdot \frac{|Q|}{C_1} \cdot \varphi^{-1} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q|} \cdot \frac{C_2 |Q|}{w(Q)} \right) = \frac{w(Q)}{C_0 C_1} \cdot \varphi^{-1} \left( \frac{C_2}{C_0} \right). \end{aligned}$$

このとき, (5.17) より,  $0 < C_2/C_0 < 1$  で  $\varphi^{-1}(1)/C_0 C_1 < 1$  だから次の不等式が得られる.

$$\int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{w(Q)}{C_0 |Q| w(x)} \right) w(x) dx \leq \frac{w(Q)}{C_0 C_1} \varphi^{-1}(1) \leq w(Q).$$

よって, Theorem 5.4 及び (5.10) より  $w \in B_{\Phi}$  がわかった.  $\square$

次に, 我々は今までの問題の逆を考える. 即ち, 次のような問題を考える.

**【問題】** 関数  $w(x)$  を  $B_{\Phi}$  の任意の weight とする. Young function  $\Phi(t)$  がどのような条件を満たせば  $w(x) \in A_{\Phi}^*$  となるか?

このことについては, Fiorenza [Fi] の論文の中でいくつかの結果が与えられている. 彼の論文の中では Young function  $\Phi$  の right derivative  $\varphi$  の連続性が仮定されている. こ

ここでは  $\varphi$  の連続性を仮定しなくとも同様の結果が成立することを示す。はじめに次の定義を与える。

**Definition 5.8.** 関数  $\Phi$  をひとつの Young function とする。  $\Phi \in \Delta'$  であるとは、ある正の定数  $C > 0$  が存在して、

$$(5.18) \quad \Phi(st) \leq C\Phi(s)\Phi(t) \quad \text{for all } s, t \geq 0$$

が成立することとする。

ここで、 $\Delta'$  を満足する Young function  $\Phi$  の基本的な性質をまとめておこう。

**Lemma 5.10.**  $\Phi$  をひとつの Young function とする。もし、 $\Phi \in \Delta'$  ならば  $\Phi \in \Delta_2$  が成立する。

**Proof.**  $\Phi \in \Delta'$  とする。このとき、ある正の定数  $C$  が存在して、

$$\Phi(st) \leq C\Phi(s)\Phi(t) \quad \text{for all } s, t \geq 0.$$

が成立する。ここで、 $s = 2$  とすると、

$$\Phi(2t) \leq C\Phi(2)\Phi(t) \quad \text{for all } t \geq 0$$

となり、 $\Phi \in \Delta_2$  がわかった。 □

**Remark.**  $\Phi \in \Delta'$  ならば、 $\Phi(t)$  は  $t = 0$  の近傍で恒等的にゼロになることはない。

**Lemma 5.11.**  $\Phi \in \Delta'$  とする。このとき

$$(5.19) \quad \Phi(t) \leq t\varphi(t) \leq C_1\Phi(t) \quad \text{for all } t \geq 0,$$

が成立する。ここで、 $C_1 = C\Phi(2)$  であって、定数  $C > 0$  は不等式 (5.18) の中の定数である。

**Proof.**  $\Phi(t)$  が  $\Delta'$  条件を満足することから次のことがわかる。

$$\begin{aligned} \Phi(t) &= \int_0^t \varphi(s) ds \leq t\varphi(t) \leq \int_t^{2t} \varphi(s) ds \\ &\leq \int_0^{2t} \varphi(s) ds = \Phi(2t) \leq C\Phi(2)\Phi(t). \end{aligned}$$

よって Lemma が証明された。 □

**Lemma 5.12.**  $\Phi$  を Young function として、その right derivative を  $\varphi$  とする。もし、 $\Phi \in \Delta'$  ならば  $\varphi \in \Delta'$  である。すなわち

$$(5.20) \quad \varphi(st) \leq C_2\varphi(s)\varphi(t) \quad \text{for all } s, t \geq 0,$$

ここで、 $C_2 = CC_1 = C^2\Phi(2)$ 、であり  $C$  は不等式 (5.18) の中の定数である。

**Proof.**  $C_1 = C\Phi(2)$  とするとき, Lemma 5.11 の (5.19) より,

$$\begin{aligned}\Phi(st) &\leq \frac{C_1\Phi(st)}{st} \leq \frac{C_1C\Phi(s)\Phi(t)}{st} \\ &= CC_1 \cdot \frac{\Phi(s)}{s} \cdot \frac{\Phi(t)}{t} \leq CC_1 \cdot \frac{s\varphi(s)}{s} \cdot \frac{t\varphi(t)}{t} \\ &= CC_1\varphi(s)\varphi(t) = C^2\Phi(2)\varphi(s)\varphi(t).\end{aligned}$$

よって,  $\varphi(t)$  もまた  $\Delta'$  条件を満足することがわかった.  $\square$

**Remark.**  $\varphi \in \Delta'$  より  $\varphi$  は  $t=0$  の近傍で恒等的にゼロにはならない.

今後の論議の中でたいへん重要な役割を果たす次の Lemma を与えておく. これは Bagby [Ba] の中で与えられている.

**Lemma 5.13** (Bagby). 関数  $\Phi$  をひとつの Young function とする. このとき, 区間  $[0, \infty)$  上で定義された continuous nondecreasing function  $g(t) \geq 0$  で次の性質を持つものが存在する.

$$(5.21) \quad \tilde{\Phi}(g(t)) \leq tg(t) \leq \tilde{\Phi}(2g(t)) \quad \text{for all } t \geq 0,$$

$$(5.22) \quad 2\Phi\left(\frac{t}{2}\right) \leq tg(t) \leq \Phi(2t) \quad \text{for all } t \geq 0.$$

ここではこの Lemma を利用して, いくつかの結果を与える.

**Lemma 5.14.**  $\Phi$  をひとつの Young function として,  $\Phi$  の right derivative を  $\varphi$ , Lemma 5.13 の中の関数を  $g(t)$  とする. このとき

$$(5.23) \quad \frac{1}{2}\varphi\left(\frac{t}{4}\right) \leq g(t) \leq 2\varphi(2t) \quad \text{for all } t \geq 0$$

が成立する.

**Proof.** はじめに, (5.23) の右側の不等式を示す. (5.22) の第 2 の不等式より次の結果がわかった.

$$tg(t) \leq \Phi(2t) = \int_0^{2t} \varphi(s)ds \leq (2t)\varphi(2t).$$

よって,  $t > 0$  のとき  $g(t) \leq 2\varphi(2t)$  となる. また,  $g(t)$  は  $t=0$  で連続で,  $\varphi(t)$  は  $t=0$  で右連続だから  $t \rightarrow 0$  として  $g(0) \leq 2\varphi(0)$  が得られる. よって  $g(t) \leq 2\varphi(2t)$  がすべての  $t \geq 0$  が成立することがわかった.

次に, (5.23) の左側の不等式を示す. (5.22) の左側の不等式より次の不等式が得られる.

$$tg(t) \geq 2\Phi\left(\frac{t}{2}\right) = 2 \int_0^{t/2} \varphi(s)ds \geq 2 \int_{t/4}^{t/2} \varphi(s)ds \geq 2 \cdot \frac{t}{4} \cdot \varphi\left(\frac{t}{4}\right).$$

よって,  $t > 0$  のとき,  $g(t) \geq (1/2)\varphi(t/4)$  が成立することがわかった. 又,  $g(t)$  の連続性と  $\varphi(t)$  の右連続性より,  $t \rightarrow 0$  として,  $g(0) \geq (1/2)\varphi(0)$  となり,  $t = 0$  でも成立することがわかった. 以上により (5.23) が示された.  $\square$

**Lemma 5.15.**  $\Phi$  をひとつの Young function とし, その complementary Young function  $\tilde{\Phi}$  の right derivative を  $\varphi^{-1}$  とする. , Lemma 5.13 の中の関数を  $g(t)$  の right derivative を  $g^{-1}(t)$  とする. このとき

$$(5.24) \quad \varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s) \quad \text{for all } s \geq 0$$

が成立する.

**Proof.** Lemma 5.13 の不等式 (5.21) の第 1 の不等式より,

$$\begin{aligned} tg(t) &\geq \tilde{\Phi}(g(t)) = \int_0^{g(t)} \varphi^{-1}(s) ds \\ &\geq \int_{g(t)/2}^{g(t)} \varphi^{-1}(s) ds \geq \frac{g(t)}{2} \cdot \varphi^{-1}\left(\frac{g(t)}{2}\right). \end{aligned}$$

よって, 次の不等式が得られた.

$$(5.25) \quad tg(t) \geq \frac{g(t)}{2} \cdot \varphi^{-1}\left(\frac{g(t)}{2}\right) \quad \text{for all } t \geq 0.$$

ここで,  $g(t)/2 = s$  と置く. 関数  $g(t)$  は単調増加だから,  $\lim_{t \rightarrow 0+} g(t)/2$  が存在するので, その値を  $s_0$  と置く. 即ち,  $s_0 = \lim_{t \rightarrow 0+} g(t)/2$ .

(i)  $s_0 = 0$  のとき, もし  $g(t)/2 = s > 0$  ならば, (5.25) より  $\varphi^{-1}(s) \leq 2t$ . また,  $g^{-1}(2s) = g^{-1}(g(t)) \geq t$ . よって,  $\varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s)$  となる.

また, (5.22) の第 1 の不等式と  $\Phi$  が Young function である性質 (2.4) より

$$g(t) \geq \frac{\Phi\left(\frac{t}{2}\right)}{\frac{t}{2}} \rightarrow +\infty$$

だから,  $s$  の値はすべての正の値を取りうる. また,  $\varphi^{-1}$  と  $g^{-1}$  は共に右連続だから

$$\varphi^{-1}(0) = \lim_{s \rightarrow 0+} \varphi^{-1}(s) \leq \lim_{s \rightarrow 0+} 2g^{-1}(2s) = 2g^{-1}(0).$$

よって,  $\varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s)$  がすべての  $s \geq 0$  で成立する.

(ii)  $s_0 > 0$  のとき.  $g(t)/2 = s > s_0$  ならば (5.25) より  $\varphi^{-1}(s) \leq 2t$ . また,  $g^{-1}(2s) = g^{-1}(g(t)) \geq t$ . よって  $\varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s)$  となることがわかった. 又,  $g(t) \rightarrow \infty$  であつたから,  $s > s_0$  なるすべての  $s$  に対して  $\varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s)$  が成立する.

次に,  $0 \leq s \leq s_0$  のとき, (5.25) で  $t \rightarrow 0+$  とすると,  $g(t)$  の連続性と,  $\varphi^{-1}$  の右連続性より,

$$0 \geq \frac{g(0)}{2} \cdot \varphi^{-1}\left(\frac{g(0)}{2}\right) = \frac{g(0)}{2} \cdot \varphi^{-1}(s_0) \geq 0.$$

$g(0) = 2s_0 > 0$  だから  $\varphi^{-1}(s_0) = 0$ . よって,  $0 \leq s \leq s_0$  のとき  $\varphi^{-1}(s) = 0$ . よって  $\varphi^{-1}(s) \leq 2g^{-1}(2s)$  が成立する. 以上によりすべての  $s > 0$  に対して (5.24) が成立することがわかった.  $\square$

**Lemma 5.16.** 関数  $\Phi$  をひとつの Young function とし,  $\Phi$  の complementary Young function を  $\tilde{\Phi}$  とする. 今,  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  と仮定する. 即ち, ある正の数  $C > 0$  が存在して, 次の不等式

$$\tilde{\Phi}(st) \leq C\tilde{\Phi}(s)\tilde{\Phi}(t) \quad \text{for all } s, t \geq 0.$$

が成立するならば,

$$(5.26) \quad \frac{1}{w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi}(|u(x)|)w(x)dx \leq C\tilde{\Phi}(\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}) \quad \text{for all } u$$

が成り立つ.

**Remark.** この Lemma では  $\Phi$  が  $\Delta_2$  条件を満たすことを仮定していない. よって,  $\varphi(t) = 0$  in a n.b.d of zero でもよい.

**Proof.**  $\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q} = 0$  なら,  $Q$  上で  $u = 0$  なので,  $\tilde{\Phi}(0) = 0$  より (5.26) は自明なので, 我々は,  $0 < \|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q} < +\infty$  として示す.  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  だから,

$$\begin{aligned} & \frac{1}{w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi}(|u(x)|)w(x)dx \\ &= \frac{1}{w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi} \left( \|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q} \cdot \frac{|u(x)|}{\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}} \right) w(x)dx \\ &\leq \frac{1}{w(Q)} \int_Q C \cdot \tilde{\Phi}(\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}) \tilde{\Phi} \left( \frac{|u(x)|}{\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}} \right) w(x)dx \\ &= C \cdot \tilde{\Phi}(\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}) \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{|u(x)|}{\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}} \right) \frac{w(x)}{w(Q)} dx \\ &= C \cdot \tilde{\Phi}(\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}) \cdot 1 = C \cdot \tilde{\Phi}(\|u\|_{\tilde{\Phi},w,Q}). \end{aligned}$$

となり, (5.26) が示された. □

**Lemma 5.17.** 関数  $\Phi$  をひとつの Young function として,  $\Phi$  の complementary Young function を  $\tilde{\Phi}$  とする. 今,  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  と仮定する. もし,  $w \in B_{\tilde{\Phi}}$  ならば, ある十分小さな  $\varepsilon_1 > 0$  を選んで,

$$(5.27) \quad \frac{\varepsilon_1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{w(x)} \right) dx \leq \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi},w,Q} \right) \quad \text{for every cube } Q \subseteq R^n$$

ここで, 定数  $\varepsilon_1$  は  $\varepsilon_1 = 1/(CC_1H)$  でとれる.  $C > 0$  は (5.18) の中の定数であり,  $C_1 = C\tilde{\Phi}(2)$ ,  $H$  は (5.24) の右辺の定数を意味する.

**Proof.** (注意) 証明を始める前に, 一つの注意を与えておく. 上の Lemma では, 関数  $\Phi$  の  $\Delta_2$  条件は仮定されていない. また,  $\varphi(t)$  は  $t = 0$  の近傍で恒等的に zero でもよい. 更に,  $\varphi(t)$  の  $[0, \infty)$  での連続性も仮定しない.

さて, Lemma の証明をしよう.  $Q$  を任意の cube とする. 仮定より,  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  であるから次の不等式が成立する.

$$s\varphi^{-1}(s) \leq \int_s^{2s} \varphi^{-1}(u) du \leq \tilde{\Phi}(2s) \leq C\tilde{\Phi}(2)\tilde{\Phi}(s),$$

ここで, 定数  $C$  は (5.18) の不等式の中に現れる定数である. 次に,  $C_1 = C\tilde{\Phi}(2)$  と置くととき次の不等式が成立する.

$$(5.28) \quad \varphi^{-1}(s) \leq \frac{C_1\tilde{\Phi}(s)}{s} \quad \text{for all } s > 0.$$

ここで一つ注意を与えておく.  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  だからとくに  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  となる. よって,  $\tilde{\Phi}$  は  $t=0$  の近傍で恒等的にゼロになることはない. よって,  $\tilde{\Phi}(2) > 0$ . よって  $C_1 > 0$  ととれる. よって, (5.28) より次の不等式が得られる.

$$\begin{aligned} \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{w(x)}\right) dx &\leq \frac{1}{|Q|} \int_Q C_1 \frac{\tilde{\Phi}\left(\frac{1}{w(x)}\right)}{\frac{1}{w(x)}} dx \\ &= \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \tilde{\Phi}\left(\frac{1}{w(x)}\right) w(x) dx. \end{aligned}$$

よって, Lemma 5.15 より次の不等式が得られる.

$$\begin{aligned} \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{w(x)}\right) dx &\leq \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \tilde{\Phi}\left(\frac{1}{w(x)}\right) w(x) dx \\ &= C_1 \cdot \frac{w(Q)}{|Q|} \cdot \frac{1}{w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi}\left(\frac{1}{w(x)}\right) w(x) dx \\ &\leq C_1 \cdot \frac{w(Q)}{|Q|} \cdot C \cdot \tilde{\Phi}\left(\left\|\frac{1}{w}\right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}\right) \\ &\leq CC_1 \cdot \frac{w(Q)}{|Q|} \cdot \left\|\frac{1}{w}\right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \cdot \varphi^{-1}\left(\left\|\frac{1}{w}\right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}\right). \end{aligned}$$

仮定より,  $w \in B_{\tilde{\Phi}}$  だから Theorem 5.4 より (5.9) の不等式が成立するので, ある正数  $H > 0$  が存在して,

$$\frac{w(Q)}{|Q|} \cdot \left\|\frac{1}{w}\right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \leq H \quad \text{for all cubes } Q \subseteq R^n.$$

よって, 次の不等式が得られた.

$$\frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1}\left(\frac{1}{w(x)}\right) dx \leq CC_1 H \varphi^{-1}\left(\left\|\frac{1}{w}\right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}\right).$$

両辺を  $CC_1 H$  で割って,  $\varepsilon_1 = 1/CC_1 H$  と置けば, 証明すべき不等式 (5.27) が得られる.  $\square$

**Theorem 5.18.** 関数  $\Phi(t)$  をひとつの Young function とする.  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  と仮定する. このとき,  $B_{\tilde{\Phi}} \subseteq A_{\Phi}^{\circ}$  が成立する.

**Proof.** (注意) この定理でも,  $\Phi \in \Delta_2$  は仮定しない. 更に,  $\varphi(t) > 0$  ( $t > 0$ ) も仮定しない.  $\varphi(t)$  の  $[0, \infty)$  での連続性も仮定しない.

さて,  $w \in B_\Phi$  とする. このとき Lemma 5.17 より, すべての cube  $Q \subseteq R^n$  に対して次の不等式が成立する.

$$\frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{w(x)} \right) dx \leq \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right).$$

$s \geq 0$  を任意に与える. Lemma 5.13 の中の関数  $g(t)$  を考える. このとき, (5.23) と (5.24) より,

$$(5.29) \quad \varphi \left( \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{2} \varphi^{-1}(s) \right) \leq \varphi \left( \frac{1}{4} \cdot g^{-1}(2s) \right) \leq 2 \cdot g(g^{-1}(2s)).$$

また, 仮定より  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  だから, Lemma 5.12 より,  $\varphi^{-1} \in \Delta^{-1}$  となる. よって, Lemma 5.10 より  $\varphi^{-1} \in \Delta_2$  となる. よって  $\varphi^{-1}(t)$  は  $t = 0$  の近傍で恒等的にゼロにならない. よって,  $t \rightarrow 0$  のとき  $\varphi(t) \rightarrow 0$  となる. よって Lemma 5.14 より  $\lim_{t \rightarrow +0} g(t) = 0$  となる. 更に,  $g(t)$  が  $[0, \infty)$  で連続だから,

$$(5.30) \quad g(g^{-1}(2s)) = 2s \quad \text{for every } s \geq 0.$$

よって, (5.29) と (5.30) より,

$$(5.31) \quad \varphi \left( \frac{1}{8} \varphi^{-1}(s) \right) \leq 4s \quad \text{for every } s \geq 0.$$

よって, (5.31) より

$$(5.32) \quad \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{w(x)} \right) dx \right) \leq \varphi \left( \frac{1}{8} \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \right) \\ \leq 4 \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}.$$

よって, (5.32) 及び,  $w \in B_\Phi$  であることと, 定数  $H$  の定め方より,

$$\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{w(x)} \right) dx \right) \\ \leq \frac{w(Q)}{|Q|} \cdot 4 \cdot \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \leq 4H.$$

よって, すべての cube  $Q \subseteq R^n$  について

$$\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{w(x)} \right) dx \right) \leq 4H$$

となり, (5.9) が  $\varepsilon = 1$  の場合に成立することがわかった.

次に, 一般の  $\varepsilon > 0$  の場合を考える. 今までの議論の中で  $w(x)$  の代わりに  $\varepsilon w(x)$  を考える.  $Q$  を任意の cube とする. Lemma 5.17 の証明と同様にして (5.28) より次の不等

式が成立する.

$$\begin{aligned}
 \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx &\leq \frac{C_1}{|Q|} \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) \varepsilon w(x) dx \\
 &= C_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot \frac{1}{\varepsilon w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) \varepsilon w(x) dx \\
 &\leq C_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot C \cdot \tilde{\Phi} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, \varepsilon w, Q} \right) \\
 &= CC_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot \tilde{\Phi} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, \varepsilon w, Q} \right).
 \end{aligned}$$

ここで, 一般的に, ノルム  $\|\cdot\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}$  の定義より,

$$\begin{aligned}
 \|f\|_{\tilde{\Phi}, \varepsilon w, Q} &= \inf \{ \lambda > 0 : \frac{1}{\varepsilon w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{|f(x)|}{\lambda} \right) \varepsilon w(x) dx \leq 1 \} \\
 &= \inf \{ \lambda > 0 : \frac{1}{w(Q)} \int_Q \tilde{\Phi} \left( \frac{|f(x)|}{\lambda} \right) w(x) dx \leq 1 \} \\
 &= \|f\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}.
 \end{aligned}$$

よって, 次の不等式を得る.

$$\begin{aligned}
 \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx &\leq CC_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot \tilde{\Phi} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, \varepsilon w, Q} \right) \\
 &= CC_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot \tilde{\Phi} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \\
 &\leq CC_1 \cdot \frac{\varepsilon w(Q)}{|Q|} \cdot \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \cdot \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \\
 &= CC_1 \cdot \frac{w(Q)}{|Q|} \cdot \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \cdot \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right).
 \end{aligned}$$

また, 仮定より,  $w \in B_{\tilde{\Phi}}$  だから, Theorem 5.8 より, (5.9) の不等式が成立するので, ある正の定数  $H > 0$  が存在して

$$\frac{w(Q)}{|Q|} \cdot \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \leq H \quad \text{for all cubes } Q \subseteq R^n.$$

ここで,  $H$  は  $\tilde{\Phi}, w$  に依存するが,  $Q$  や  $\varepsilon > 0$  に依存しない. よって, 次の不等式が得られる.

$$\frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \leq CC_1 H \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \quad \text{for all cubes } Q \subseteq R^n.$$

よって、次の結果が成立する。

$$\frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \leq \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \quad \text{for all cubes } Q \subseteq R^n.$$

さて、 $s \geq 0$  を任意に与える。Lemma 5.13 中の関数  $g(t)$  を選ぶ。このとき、(5.23) と (5.24) より

$$(5.33) \quad \varphi \left( \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{2} \varphi^{-1}(s) \right) \leq \varphi \left( \frac{1}{4} \cdot g^{-1}(2s) \right) \leq 2 \cdot g(g^{-1}(2s))$$

が得られる。また、仮定より  $\tilde{\Phi} \in \Delta'$  だから、Lemma 5.12 より  $\varphi^{-1} \in \Delta^{-1}$ 。よって、Lemma 5.10 より  $\tilde{\Phi} \in \Delta_2$  となる。よって、 $\varphi^{-1}(t)$  は  $t=0$  の近傍で恒等的にゼロになることはない。よって、 $\lim_{t \rightarrow 0+} \varphi(t) = 0$  となることがわかる。よって、Lemma 5.14 より、 $\lim_{t \rightarrow 0+} g(t) = 0$  となる。更に、 $g(t)$  が  $[0, \infty)$  で連続だから、

$$(5.34) \quad g(g^{-1}(2s)) = 2s \quad \text{for every } s \geq 0.$$

よって、(5.33) と (5.34) より

$$(5.35) \quad \varphi \left( \frac{1}{8} \varphi^{-1}(s) \right) \quad \text{for every } s \geq 0.$$

となる。よって、(5.35) より次の結果が得られる。

$$(5.36) \quad \begin{aligned} \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) &\leq \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \varphi^{-1} \left( \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \right) \right) \\ &\leq 4 \cdot \left\| \frac{1}{\varepsilon w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \\ &\leq \frac{4}{\varepsilon} \cdot \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q}. \end{aligned}$$

よって、 $w \in B_{\tilde{\Phi}}$  だから、

$$\begin{aligned} \left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{1}{8} \cdot \frac{1}{CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \\ \leq \frac{1}{|Q|} \cdot \varepsilon w(Q) \cdot \frac{4}{\varepsilon} \cdot \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \\ = \frac{4 \cdot w(Q)}{|Q|} \left\| \frac{1}{w} \right\|_{\tilde{\Phi}, w, Q} \leq 4H. \end{aligned}$$

よって、

$$\left( \frac{1}{|Q|} \int_Q \varepsilon w(x) dx \right) \varphi \left( \frac{1}{8CC_1H} \cdot \frac{1}{|Q|} \int_Q \varphi^{-1} \left( \frac{1}{\varepsilon w(x)} \right) dx \right) \leq 4H$$

がすべての cubes  $Q$  と  $\varepsilon > 0$  について成立する。ここで、定数  $1/8CC_1H$  と  $4H$  は  $\varepsilon > 0$  に無関係な定数であることを注意しておく。よって  $w \in A_{\tilde{\Phi}}^*$  が示された。□

この節の最後に興味深い結果を一つ与える.

**Definition 5.9.** 関数  $w(x)$  が  $R^n$  上の  $A_1$ -weight ( $w \in A_1$ ) であるとは, ある正の定数  $C$  が存在して,

$$\frac{1}{|Q|} \int_Q w(y) dy \leq C \operatorname{ess\,inf}_{x \in Q} w(x) \quad \text{for all cubes } Q \subseteq R^n$$

が成立するときと定める.

また, 関数  $a(s), b(s)$  は  $[0, \infty)$  上で定義された positive continuous function で次の条件を満たすものとする.

$$(5.37) \quad a(s) > 0, \quad b(s) > 0 \quad \text{if } s > 0 \quad \text{and} \quad a(0) = b(0) = 0;$$

$$(5.38) \quad \int_0^1 \frac{a(s)}{s} ds < +\infty, \quad \int_1^\infty a(s) ds = +\infty;$$

$$(5.39) \quad b(s) \text{ は nondecreasing で } \lim_{s \rightarrow \infty} b(s) = +\infty.$$

関数  $\Phi(t)$  と  $\Psi(t)$  を次のように置く.

$$(5.40) \quad \Phi(t) := \int_0^t a(s) ds, \quad \Psi(t) := \int_0^t b(s) ds \quad \text{for } t \geq 0.$$

次の不等式を考える.

$$(5.41) \quad \int_0^t \frac{a(s)}{s} ds \leq C_1 b(C_2 t) \quad \text{for all } t > 0,$$

$$(5.42) \quad \int_{R^n} \Phi(Mf(x)) w(x) dx \leq C_3 \int_{R^n} \Psi(C_4 |f(x)|) w(x) dx \quad \text{for all } f \in L_w^\Psi(R^n).$$

我々は次の結果を得る.

**Theorem 5.19.** 上の性質 (5.37) から (5.42) を満足するすべての関数  $a(s), b(s), \Phi(t), \Psi(t)$  に対して, (5.41) ならば (5.42) が成立するための必要十分条件は,  $w \in A_1$  となることである.

最後の定理の証明の中では,  $B_\Phi$  weight の概念が重要な役割を果たす. 詳しくは [Ki] を参考にしてほしい.

#### REFERENCES

- [An1] T. Andô, *On some properties of convex function*, Bull. Acad. Polon. Sci. Sér. Math. **8** 1960, 413–418.
- [An2] T. Andô, *Linear functionals on Orlicz spaces*, Nieuw Arch. Wisk. **8** (1960), 1–6.
- [An3] T. Andô, *Certain classes of convex functions*, Soviet Math. **2** (1961), 139–142.

- [Ba] R. J. Bagby, *Weak bounds for the maximal function in weighted Orlicz spaces*, *Studia Math.* **95** (1990), 195–204.
- [BO] Z. W. Birnbaum and W. Orlicz, *Über die Verallgemeinerung des Begriffes der zueinander konjugierten Potenzen*, *Studia Math.* **3** (1931), 1–67.
- [Ca] L. Carleson, *On convergence and growth of partial sums of Fourier series*, *Acta Math* **116** (1966) 135–157.
- [FS] C. Fefferman and E. M. Stein, *Some maximal inequalities*, *Amer. J. Math.* **93** (1971), 107–115.
- [Fi] A. Fiorenza, *On certain inequalities in weighted Orlicz spaces*, *Rendiconti di Matematica, Serie VII* **13**, Roma(1993), 421–430.
- [Po] Ch. J. de la Vallée Poussin, *Sur l'intégrale de Lebesgue*, *Trans. Amer. Math. Soc.* **16** (1915), 435–501.
- [Cu] GARCÍA-CUERVA AND J. RUBIO DE FRANCIA, *Weighted norm inequalities and related topics*, North Holland (Amsterdam, 1985).
- [Ga] I. GENEBASHVILI, A. GOGATISHVILI, V. KOKILASHVILI AND M. KRBEK, *Weight theory for integral transforms on spaces of homogeneous type*, Pitman Monographs and Surveys in Pure and Applied Math. **92**, Longman, (England, 1998).
- [Hu] R. Hunt, *On the convergence of Fourier series*, in: ProcConfat Southern Illinois Univ(1967) 235–255.
- [KaT] M. Kato and Y. Takahashi, *On the von Neumann-Jordan constant for Banach spaces*, *Proc. Amer. Soc.*, **125** 1997, 1055-1062.
- [KT] R. A. Kerman and A. Torchinsky, *Integral inequalities with weights for the Hardy maximal function*, *Studia Math.* **71** (1981/82), 277–284.
- [Ki] H. Kita, *Weighted inequalities for iterated maximal functions in Orlicz spaces*, *Math. Nachr.*, (2004) to appear.
- [Ki1] H. Kita, *On interpolation of the Fourier maximal operator in Orlicz spaces*, *Acta Math. Hungar.* **81(3)** (1998), to appear.
- [Ki2] H. kita, *Integrability properties of the maximal operator on partial sums of Fourier series in Orlicz Spaces*, *Math. Nachr.* **193** (1998), 57–74.
- [Ki3] H. kita, *On maximal operator of partial sums of Fourier series in Orlicz spaces*, *Acta Math. Hungar.* **77(1-2)** (1997), 1–13.
- [Ki4] H. Kita, *On Hardy-Littlewood maximal functions in Orlicz spaces*, *Math. Nachr.* **183** (1997), 135–155.
- [Ki5] H. Kita, *On maximal functions in Orlicz spaces*, *Proc. Amer. Math. Soc.* **124(10)** (1996), 3019–3025.

- [Ki6] H. Kita, *Inequalities with weights for maximal functions in Orlicz spaces*, Acta Math. Hungar. **72** (1996), 291–305.
- [Ki7] H. Kita, *On a converse inequality for maximal functions in Orlicz spaces*, Studia Mathematica **118** (1996), 1–10.
- [Ki8] H. Kita, *On an interpolation theorem of Hunt-Sjölin*, Acta Math. Hungar. **67** (1995), 97–107.
- [KY1] H. Kita and K. Yoneda *On quasi  $\varphi(L)^*$ -a.e. convergence of Fourier series of functions in Orlicz spaces*, Acta Math. Hungar. **65** (1995), 339–360.
- [KY2] H. Kita K. Yoneda *Orlicz space  $L_\varphi^*$  and some inclusion relations*, Math. Japon. **37** (1992), 1189–1199.
- [KY3] H. Kita and K. Yoneda *A treatment of Orlicz spaces as a ranked space*, Math. Japon. **37** (1992), 775–802.
- [Ki9] H. Kita, *Convergence of Fourier series of a function on generalized Wiener's class  $BV(p(n) \uparrow \infty)$* , 1991, Acta Math. Hungar. **57** (1991), 233–243.
- [Ki10] H. Kita, *On control functions of a.e. convergence of the Fourier series of bounded functions*, Math. Japon. **36** (1991), 649–655.
- [KY4] H. Kita and K. Yoneda, *A generalization of bounded variation*, Acta Math. Hungar. **56** (1990), 229–238.
- [KY5] H. Kita, T. Miyamoto and K. Yoneda, *Modular function spaces and control functions of almost everywhere convergence*, Commentationes Mathematicae (Poznan). **41** (2001) 99– 133.
- [Ki11] H. Kita, *On the constant of Hunt's  $L^p$ -estimate and control functions*, Math. Japon. **35** (1990), 283–288.
- [KK] V. Kokilashvili and M. Krbeć, *Weighted inequalities in Lorentz and Orlicz spaces*, World Scientific, (1991).
- [KR] M. A. Krasnosel'skii and Ya. B. Rutickii, *Convex Functions and Orlicz Spaces* (English translation), Noordhoff Ltd Groningen (1961).
- [Muc] B. MUCKENHOUPT, *Weighted norm inequalities for the Hardy maximal function*, Trans. Amer. Math. Soc. **165** (1972), 207–226.
- [Na] H. Nakano, *Modulated Semi-ordered Linear Spaces*, Maruzen Tokyou (1950).
- [Or1] W. Orlicz, *Über eine gewisse Klasse von Räumen vom Typus B*, Bullint'lde l'AcadPolserie A **8** (1932), 207–220.
- [Or2] W. Orlicz, *Über Räume ( $L^M$ )*, Bullint'lde l'AcadPolserie A **10** (1936), 93–107.

- [Or3] W. Orlicz, *Some classes of modular spaces*,  
Studia Math'26 (1966) 165–192.
- [RR] M.M. Rao and Z.D. Ren *Theory of Orlicz Spaces*, Marcel Dekker 1991.
- [RR2] M.M. Rao and Z.D. Ren *Applications of Orlicz Spaces*, Marcel Dekker 2002.
- [Sj] P. Sjölin, *Two theorems on Fourier integrals and Fourier series*,  
Uppsala University Report 3 1986.
- [So] F. Soria, *Integrability properties of the maximal operator on partial sums of Fourier series*,  
Sem. Universidad Autónoma de Madrid, (1986).
- [Zyg] A. ZYGMUND, *Trigonometric series*, Cambridge Univ. Press, (Cambridge, 1959).

DEPARTMENT OF MATHEMATICS, FACULTY OF EDUCATION,  
KAGOSHIMA UNIVERSITY, 20-6 KORIMOTO 1-CHOME KAGOSHIMA 890-0065, JAPAN  
E-mail address: hkita@edu.kagoshima-u.ac.jp